明日にむかって

発行／社会福祉法人 陽光会　陽光保育園　編集／陽光保育園「明日にむかって」編集委員会
発行日／2002年3月30日　住所/東京都板橋区大谷口上町23-1　☎03(3956)1068
38号

卒園式で職員が子どもたちに「春の歌」を贈りました。ゲーテ詩のベートーベン作曲の歌です。約180年ほど前に作られた曲ですが、今も共通する想いが溢れています。／♪世界は言葉に満ちて、一つのことを語る。耳を澄ませそれを聞けば、平和こそ我らの願い。人も獣も小鳥たちも共に暮らそういつまでも♪／米軍は、昨年11月アフガニスタンにクラスター爆弾を投下しました。クラスター爆弾一つで202個の子爆弾に分かれ、その1割近くが不発弾になり、知らずに触ってしまう子どもたちが犠牲になっています。「戦争は嫌いだ」と子どもたちは訴えています。／イスラエルで兵役拒否を訴える若者が出てきています。「争いは、平和をつくらず。パレスチナ人を受け入れて共に生活できる方法が必要」と／♪世界は春を迎えて、新しい門出に立ち。やさしさと勇気に守られ、我らは今旅立つ。喜びも悩みも分け合い、どこまでも歩いていこうよ♪と思いを込めて歌います。　(T・R)

子育て座談会 ● その1

今、子どもたちに必要なこと

いつの世も子育ての悩みはつきないものですが、今はとくにそのあり方が問われています。そこで今回は子育て中のお二人を招き、陽光保育園園長とともに子育てについての座談会を開きました。話題は尽きなく、また大幅カットするにはしのびなく、何回かに分けて掲載することにしました。子育てのヒントになれば幸いです。

●少年事件から思い起されること

――つい先日、小平市でホームレスの男性に中学生が数人で何時間にもわたって暴力をふるい、それも、いったん中断してまた暴力を繰り返して、結局のところ殺人にいたったという事件がありましたが、ここには、今日の子どもたちを取り巻く状況をはじめ、子どもの育ち方などさまざまな問題が内包されていると思います。メディアで指摘されていたのは、ゲーム感覚とか、子どもたちの居場所の問題でした。ホームレスを蔑視する子どもたちの視線もとても気になったのですが、高田園長が言われたのは、この子たちの乳幼児期の育ちはどうだったのかということでした。このあたりを糸口に話をすすめていきたいと思います。

中村　これまでにも同じような事件がありましたよね。今の世の中は昔と全然違ってきていて、子どもたちがゲーム感覚で物事を行うのはなぜか、たとえばケンカをしても、すぐにナイフを持ち出し、簡単に人を刺したりするのはなぜなのか、よくわからないんですが、そういう世の中にしてしまったのは大人の責任だと思うんです。

中川　去年か一昨年、中学校の防災訓練で、「おやじの会」の企画として独居老人を迎えにいくという話が出ました。災害時には学校が避難場所になるので、そのとき独り暮らしの高齢者を迎えにいけたらということで、独居老人マップ（地図）を作ろうということになったんです。そのことを町会の人に話したら、いったんは同意を得たんですが、防犯上の問題で、中学生たちにそういう無防備な老人の住所を知らせるわけにはいかない、だからマップは作れないということになったんです。

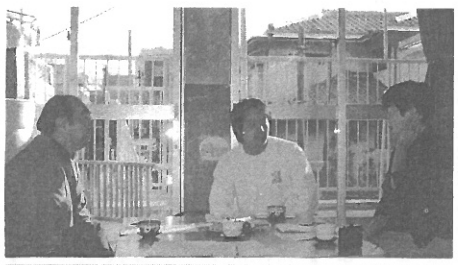
――つまり、中学生は悪いことをするという前提にたっているわけですね。

中川　中学生が関わることで老人や弱者に対する蔑視などを緩和する力になるはずだけど、それが逆に犯罪を生む可能性もあるという二面性をいわれる世の中になってきたということですよね。小さいときからの地域の人との関わりということをキーワードに年齢を下げていくと、こういう状況になっていかないための方策は見えてくる気がするんだけど、こういう状況になっていく原因はまだわからないな。

高田　こういった少年事件が起きたとき思うのは、社会的な問題、子どもたちの置かれている状況、子どもたちが育ってきた環境、大人の問題など、いろいろな問題が交差してさまざまな側面が出てきているということですね。地域が子どもたちを支え育てる力が昔はあったのに、今はなくなってきているし……。

中村　ひとつには今、情報社会ですよね。テレビをはじめインターネットとか、情報があふれていて、昔なら隣の人に聞いたかもしれないことでも、今は家にいながらにして何でもわかってしまう。たとえば、未成年者の犯罪はそれほど罪に問われないということまで子どもにわかってしまう。そういう情報社会のなかで子どもをどう守っていくか。インターネットでは驚くようなサイトもあるのだけど、子どもをそういったものから守っていく手立てはないように思えてならないのですが。

高田　事件を起こした子どもの育ってきた道筋をたどってみることができるといいんですが、人権の問題もあって情報が公開されないため、憶測で言うと、自分を抑える力が育っていない、自分をコントロールする力が育ってきていないのを感じます。



暖かい日差しのさす陽光保育園の0歳児の部屋で座談会を開きました。出席者は左から中川守さん、中村幸さん、高田礼子園長。
中川　守さん：1955年生、三児（20歳、18歳、15歳）の父、陽光保育園後援会会長
中村　幸さん：1969年生、一児（1歳6か月）の父　陽光保育園父母の会会長
高田　礼子：1959年生、一児（15歳）の母　陽光保育園園長

中川　日本の子どもの前頭葉の発達のしかたがおかしくなったという話を聞いたことがあります。前頭葉の活性細胞は興奮を抑えたり、自分をコントロールしたりするもので、ふつうなら一〇歳から一三、一四歳ころにぐんと増えるはずなのが、日本人の子どもは逆に減っているというんです。なぜそうなるのかというと、幼児期の育ち方に関係があるのではと言っていたように思うんですが……。

●自分で選び判断できる力を育てる

高田　大脳の発達について研究している人が、興奮する力を十分に出すことによって、抑制する力も育っていく。幼児期から一〇歳くらいまでに十分遊ぶ、われを忘れて遊ぶ、昔みたいに、気がついたら真っ暗だった、というくらい友達と夢中になって遊ぶ、そういう経験こそが大切だと言っていました。だけど今は、小さいころから塾に行くとか、テレビゲームをして友達と触れ合わないとか、十分に遊ぶことができず、子ども時代を充実できないまま大人になってしまう子が多いのでは。それには大人の責任もあって、早く早くとせきたてている現実もあると思います。

中村　ぼくは三〇代なんですが、今は手に技術がなければ生きていけないような厳しい時代で、ぼくはたまたま技術関係で仕事をしているんだけれども、これからの子どもにとって何が大切かということをとっても考えますね。友達づくりも大切だし、外で体を動かして遊ぶのも大切だけど、やっぱり勉強させることも大切ですよね。

高田　小学校の総合的な学習で英語をやるといえば、幼児期から英語を習わせなければと、お母さんたちはすごく心配しますよね。何かを与えなければならないと思ってしまうんですね。でも、幼児期に育てたい力は、自分で選べる力、自分で判断できる力なんです。自分が言ったときに受けとめてくれる相手がいることで、自分で選ぶ力はついていくし、子どもが「自分で、自分で」って言ったとき待ってあげられたら、自分で選びとる力が育っていくと思うんです。そういう意味で、一歳、二歳のときの親子関係とか保育園での保育の仕方がとても大切だと、最近すごく感じています。

教育学者の大田堯先生が「間（ま）い」と「答え」のあいだには「間（ま）」があって、その「間（ま）」こそが大切で、そこに教育があると言っています。自分の問題を発見する力を育てるためには、この「間（ま）」が必要なんだと思います。

中村　一歳半の娘の七海（ななみ）を見ていると、靴をはくことひとつをとっても一生懸命やっていて、そのとき、手を貸すのではなく、やっぱり見ていてあげることが大切なんですよね。なかなかうまくいかなくて、途中で怒ったりしながらも、ああでもない、こうでもない、じゃあこうしてみようと、やっと靴がはけると、見ているこちらもうれしくなるんですよね。で、「よくできた！」ってほめると、自慢げにポーズしたりするんです。そういうふうに、小さいうちから自分で考えさせるってことが、今言われた「間（ま）」を大切にするということですよね。

高田　「間（ま）」をちゃんと感じてて、中村さんみたいにしたとき、子どもはそこにいる人に共感を求めるというのか、親のほうを見てますよね。そこに見ててくれる人がいるってことが、子どもにとっては大事で、そこに誰もいないと子どもは育っていかないと思うんです。放っておくんじゃなく、まかせっぱなしにするのでもなく、そこにちゃんといてあげて、見てあげること、その見ているしかない目が必要なんですね。

中村　ぼくはその見ていることを楽しんでいます。うんうん、成長してるぞって感じで。

中川　みんな、そういうふうに楽しめるようになるといいですよね。親は子どものことをいつのまにか急かせていたり、子どもが判断する前に判断してしまったりということがあって、子どもの芽を摘んでいるんだけど、大人はそれを「しかたないのよ」ですませてしまったり、あるいは芽を摘んでいることに気がついていない場合もありますよね。先に答えを言っちゃったほうが楽ということもあるし……。

子どもが小さいころって、朝は時間との戦いですよね。そのなかで子どもに「間（ま）」をつくってやるっていうのはとても大変で、かなり強引にならざるをえないっていうこともあるし……（笑）。上の娘がまだ一歳くらいのときに「お父さん早く（会社に）行きなよ」って言ってくれたことがあって、親のことをよく見ているんだなって思いましたね。いろんな状況を知ったうえでなのかどうかはよくわからないけど、親のがんばっている部分が子どもの目には映っているのかもしれないですね。

（つづく）

3月5日、3～5歳児クラスはお別れ遠足で森林公園へ。梅林の中で思いっきり遊びました。写真は、卒園する5歳児クラスの子どもたち

親子でいっしょに遊びましょう

（リズム、うた、砂あそび　散歩、赤ちゃん体操など）

陽光保育園では、地域の乳幼児、お母さんを対象に月1回、「親子でいっしょに遊びましょう」の催しを行っています。同時に育児相談にも応じています。お気軽にご参加ください。無料です。

〔対　象〕　0歳児～5歳児
〔場　所〕　陽光保育園
〔時　間〕　午前9時～11時

●2002年度の予定

5月9日(木)	6月5日(水)
7月9日(火)……七夕集会	
9月6日(金)	10月23日(水)
11月6日(水)	12月11日(水)
1月15日(水)	2月13日(木)
3月5日(水)	

●事前にご連絡のうえ、活動しやすい服装でご参加ください。
☎3956－1068

《園児募集》　3歳児＝2名
4歳児、5歳児＝各1名
＊お申し込みは区役所保育課まで。

ごあんない

◆お花見
日時　4月7日(日)　11時～
場所　城北公園・茂呂遺跡そば
会費　大人　500円／子ども　無料
＊バーベキュー、焼きそばを用意します。皿、コップ、箸を持参して下さい。

◆陽光保育園後援会2002年度総会
日時　5月25日(土)　18時30分～
場所　陽光保育園ホール
＊第一部催物の後、総会を開催。軽食をご用意します。

◆夏のバザー
日時　7月7日(日)　10時～14時
場所　陽光保育園

◉地域共育講座

絵をとおして見る愛の子育て

講師　新見俊昌先生
日時　2002年6月22日(土)　19時～
会場　陽光保育園ホール（無料）
＊新見俊昌先生は、長い間、美術教育をすすめる会の代表として、教師、保育士たちを支え励ましてきた方です。豊かな実践と確かなお話は、涙と笑いのうちにあっというまに終了となります。乞う、ご期待！

◆特　集◆

子どもの発達を考える㉛

ヒトが人間になるとき

その4　絵本との出会い

前号、前々号では仲間のなかでのコミュニケーションについてとりあげましたが、今回はヒトが人間になるために欠かせない〈絵本との出会い〉をとりあげます。赤ちゃんは8～9か月を過ぎると、自分から座位をとれるようになり、人の区別もできるようになって、人見知りを始めます。易しい本を読んであげると、絵を見て楽しむようになるのもこのころからです。落ち着いた雰囲気のなかで、メリハリのある言葉でゆっくり読んであげ、「本との出会い」を大切にしたいものです。

忙しい子育てのなかでいちばん落ち着くのは、子どもとともに一冊の本を手にし、「さあ読むよ」と子どもに語りかけるようして、読みだすときではないでしょうか。

朝早くから子どもを起こし、せかしながら慌ただしく保育園に送り届け、一日の仕事を終えると、こんどは保育園に子どもを迎えにいき、朝ほどではないにせよ、食事、入浴、後片付けと山のような家事をこなし、お風呂上がりの汗をふきふき、本棚からとっておきの本を選び、その絵本の魅力を親子で共有するとき、それは子育てのいちばんの至福のときではないでしょうか。

陽光保育園では、お昼寝の前にはいつも絵本の読み聞かせをしています

読み聞かせは環境を整えてから

大切にしたいひとときですから、家事をすべて終え、トイレもすませ、途中では立ち上がらなくてもよいように環境を整えてから読み聞かせの世界に入りたいものです。立ち上がらないまでも、絵本を読んでいる途中で「ああそうそう、今日シーツ持ってきたっけ?」などと急にまったく関係のないことを話したりすると、子どもはさぞがっかりすることでしょう。口に出して「がっかりした」とは言わなくても、中断する読み方を積み重ねていくと、ほとんどの場合、絵本に魅力を感じない子どもになってしまいます。

楽しいから読む

なぜ絵本を読むのかと問われたら、なんと答えたらいいでしょう。子どもにとって絵本とは、役に立つ、ためになる、情操豊かになるといった目的のあるものではなく、「楽しいから読む」この一点でいいのです。

大人が「今日はこの本を読んであげよう」と選ぶ一冊、それは「この絵本の魅力を子どもと分かち合おう」「これはなんておもしろいんだろう、素晴らしい本だ」と思える本であることです。そして「楽しいから読んであげるよ」という気持ちで読むと、その本の魅力が不思議と子どもに伝わっていくものです。さらに、好きになった本を何回、何十回と読んでいくうちに、子どもはさらに絵本が大好きになっていきます。ですから、まず大人が絵本を楽しむことです。面倒といった気持ちで読んだり、保育園などでも、読む時間になったから読むといった事務的なものになってはマイナスです。

大人が絵本を楽しむ、そして「楽しいから読んであげたい」。それができたら、毎日手にとる一冊は〈珠玉の一篇〉になるのではないでしょうか。

それも、「楽しいから、読んであげるんだからね」と押しつけると、せっかくの絵本もつまらないものになります。「楽しいから読んであげたい」は、絵本を楽しんでいる大人にとっては、時間さえ確保すれば実現できることなのですが、これはじつは易しいようで奥の深いことなのです。

絵本は読んであげるもの

絵本は子どもに読ませる本ではなく、〈大人が子どもに読んであげる本〉であることを忘れてはなりません。早く自分で読めるようにと文字を覚えさせようとすると、肝心なストーリーがどこかへ吹き飛んでしまいます。

文字が全然ない絵本をどのように読んだらいいのでしょう? と聞かれることがあります。「絵本は絵を見るもの」、言い換えれば「絵を読む」といってもいいでしょう。大人が読む言葉を聞きながら、子どもはひたすら絵を見ているのです。絵が物語っているのです。絵本は素晴らしい絵と言葉でつづられた世界です。ひととおり読んだだけでは味わいきれるものではありません。繰り返し読んでいくなかで新しい発見があり、それもまた楽しみのひとつです。

よい絵本とは

子どもは、自分が物語の主人公になったつもりで、絵本の世界に入り込みます。ですから、絵の場面の進み方と言葉のリズムがぴったり一致していることが大切です。

優れた画家による絵は細心の注意が払われ、言葉に書き表されていない部分も絵で語られています。

●子どもがはじめて出会う絵本　あまり大きくなく、ページ数も少なめで、できるだけ子どもの手で開けたり閉じたりしやすく、形や色のはっきりした挿絵の絵本が望ましいといえます。例えば『いないいないばあ』『もうねんね』『あなたはだあれ』やディック・ブルーナの『子どもがはじめて出会う絵本』などです。

●2～3歳児が楽しむ本　生活と密着した本がおもしろくてわかりやすく、共感しやすいようです。また、繰り返しのパターンがリズミカルに表現されているものが大好きです。代表的なものに『三びきのやぎのがらがらどん』『てぶくろ』『三びきのこぶた』『おおかみと七ひきのこやぎ』「ぐりとぐら」シリーズなどがあります。

●4～5歳児が楽しむ本　2～3歳児よりストーリー性のある本を楽しみます。『すてきな三にんぐみ』『おじさんのかさ』『おやすみなさいフランシス』『だいくとおにろく』『やどなしねずみのマーサ』『おはなしバンザイ』『おとうさんおはなしして』『キリギリス』『つるにょうぼう』『じごくのそうべい』『おしゃべりなたまごやき』『おきんのはなかんざし』『九人のきょうだい』『しょうぼうじどうしゃじぶた』など。

●5～6歳児が楽しむ本　5歳をこえると、自分が体験できないようなことでも、お話を聞いて頭の中でイメージすることができるようになります。集中してじっと聞き入って楽しむ子どもには、少しずつ絵のない物語を読んであげると、お話の世界が爆発的に広がっていきます。長いお話は一回では読み切れないので、「つづきはまた明日」と、何回かに分けて読んであげるとよいでしょう。ただし、あまり小刻みではおもしろくありません。次が待ち遠しくなるくらい、画面の展開があるところまでたっぷり読んであげてください。例えば「王さま」シリーズ、『たつの子たろう』『ちいさいおしろ』『北極のムーシカ、ミーシカ』『ちびっこカムのぼうけん』『おこんじょうるり』『森は生きている』『黄金のかもしか』『つばめがはこんだ南のたね』など。

参考までにいくつかの絵本をあげましたが、これはほんの一例で、まだまだ素晴らしい絵本があるのはいうまでもありません。

（主任保育士　原　芳子）

娘といっしょに感情移入

みなさんも、自分の子どもと絵本を読むことに大きな喜びを感じていらっしゃることでしょう。我が家の場合、一歳ぐらいのときは〝本を読む〟という概念がなかったため、戸惑いました。二歳半くらいからはお気にいりの本が増えてきて、私や夫に読んでほしいとせがむようになりました。実際に見たことがないものや未体験のことでも、娘は自分なりに絵を見て感じとっているようで、驚かされます。楽しい場面や愉快な場面では娘といっしょに盛り上がり、怖い部分や緊張する場面ではいっしょにハラハラドキドキ。大人になって胸の奥にしまっていた素直な感情が私にもよみがえります。

私自身、母に絵本を読んでもらったことなどほとんど忘れていたのですが、保育園の本棚から娘が借りてきた絵本が、私にも懐かしい一冊だったりすると、再会できたうれしさに、娘とともに読む楽しみが二倍になるのです。

（2歳児クラス・あみなの母　絹川典子）

娘も気に入る私の懐かしの絵本

夕方、保育園にお迎えにいくと、我が子はよく本を借りるといって選んできます。それを見て、字が少なそうな本だと、私は密かにホッとします。帰宅してせがまれても、「ちょっと待って」を繰り返し、読んであげられるのはたいてい夕食後です。それも、最初ははりきって読むのに、せがまれて二回目になると、つい手抜きになってしまいます。それでも子どもは私の膝にのって満足そうです。

時々、親子で気に入った本を寝るときにまた読むことがあります。それはだいたい私が子どものころに読んだ本で、私が懐かしがるので子ども も気に入るのです。読みながら、小さいころの自分に子どもが重なって見え、将来、この子もこんなことを感じるかもしれないなどと考えて不思議な気分になります。

ビデオだと私が別のことをしている場合が多いのですが、本は親にくっついて親の声で読んでもらえるので、それだけでもうれしいのだろうなと思います。短くても子どもと向き合う貴重な時間だと思います。

（4歳児クラス・みのりの母　石田由美）

短くても貴重な読書タイム

我が家の読書タイムは夜。「寝るよ」の合図に、「絵本を読んで」と返事があります。二人の娘が好きな絵本を一冊ずつ選び、下の子は膝の上、その隣に上の子がくっついて座り、毎晩親子で読書を楽しんでいます。でも、時間がなくなり、「寝る準備をして」と言っても二人でいつまでもふざけあったりしているのを見るとイライラして、「今日は読まない」と言ってしまいます。すると泣きながら「読んでよ。お願いします」と言う子どもたち。本当に絵本を待っているんだなと感じます。いつもは言葉をはさんだりするのに、そんな日は黙ったまま聴いています。

たった一五分の読書の時間をなんで心を添えて親子でいっしょに楽しめないんだろうと、反省してしまいます。毎日の生活に追われ、あくせくしている自分にはっと気がつきます。絵本の世界を通してもう一度心を見つめなおし、子どもといっしょに感動できる母親でありたいとつくづく思います。家事をほっぽりだしても、子どもとの貴重な時間を大切にしたいと思います。

（1歳児クラス・あみ、5歳児クラス・ゆりの母　初山　薫）

お父さんの出番です!!

〝女の子チーム〟に圧倒される日々

我が家には今年陽光保育園を卒園する咲樹（さき）と、別の保育園に通っている一歳になった春瑠（はる）という二人の娘がいます。

去年の春、次女の春瑠が残念なことに咲樹と同じ陽光保育園に入れないと決まり、家から近い陽光保育園は妻の担当、遠いほうの保育園はなぜか私の担当となってしまいました。それからというもの、朝の慌ただしさは数倍になりました。それまでは咲樹一人を妻と私でみればよかったのですが、次女が保育園に通うようになってからは、それぞれの担当者が朝ごはんを食べさせ、保育園の準備をして家を飛び出していくという生活になりました。

ちょうどそのころから私の仕事が忙しくなり、帰宅する時間も遅くなってしまうようになり、子どもたちと遊べる時間が極端に減ってしまいました。そのせいか、それまではお父さん派だった咲樹がお母さん派に寝返ってしまい、児玉家の力関係が崩れてしまいました。さらに咲樹は、家の中で女の子チームなるものを結成して、団結力を固めているようなのです。妻と咲樹が二人して、やれタバコをやめろだの、腹がたるんできたからダイエットしろだの、口やかましい毎日です。最近では、やっとよちよち歩きを始めた次女までが、「うっ、うっ」と私を指差して抗議に参加しているようです。父の威厳はなくなっていくばかりで、一家の大黒柱のようなお父さんにはなかなかなれないようです。

それでも妻の話によれば、私が家にいない分、咲樹が家事の手伝いをしたり、よく妹の面倒をみてくれているようです。子どもがそうやって成長していく姿はとてもうれしいものですが、その分、親から離れていくような気もして、寂しくもなります。そんな二人の寝顔を見ていると、心が癒され、明日も頑張ろうと思えてきます。

今春、次女が陽光保育園に入る予定ですが、二人ともどんな環境にいても、元気で明るく育ってほしいと願っています。

（5歳児クラス・咲樹の父　児玉崇宏）